

第16号

定価1年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



発行 檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1
Tel. 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 石橋英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

今、戦争体験者が語る意味、聴く意味

松村隆氏が自費出版した著書（江差の本屋さんで発売中）



○歳。なりふり構わず狩り出される。私は最後の兵隊。そこから軍隊一月・捕虜二年の青春を過ごすことになる。一九四五年七月一日、札幌月寒の北部軍司令部に入隊命令。「日本は絶対に負けない」ということだけは疑っていなかった。最初は樺太。初年兵に対する古参兵のしこ

きはただごとでない。少しでも気がくわなければ、

松村隆氏講演

一月二〇日（火）南ひやま9条の会主催の「平和を語るつどい」戦争体験者松村隆氏講演「軍隊一月・捕虜二年の青春」が江差町役場保健センターで行われました。参加者は約八〇名。松村氏の体験談をじっと聞き入りました。【以下講演要旨】

私は、昭和元年の生まれ。昭和六年に満州事変。昭和一六年には太平洋戦争。物心ついたら戦争をしていた時代。ゆえに私の受けた教育は、軍国教育で、教育勅語にのっとった教育。奉安殿（教育勅語と天皇陛下の写真が奉納）に頭を下げて通学。「日本は神国。いざというときは神風が吹き負けない」と子どもの頃から教え込まれ、特攻隊を賛美していた。教育の力は怖いと知るの、後のことである。

軍隊の生活

一八歳で兵役命令。本来、徴兵は二〇歳。なりふり構わず狩り出される。私は最後の兵隊。そこから軍隊一月・捕虜二年の青春を過ごすことになる。一九四五年七月一日、札幌月寒の北部軍司令部に入隊命令。「日本は絶対に負けない」ということだけは疑っていなかった。最初は樺太。初年兵に対する古参兵のしこ

軍隊一月 捕虜二年の青春



容赦なく殴りつける。

鼻血が噴出し、口の中が切れ、食事もとれない。軍隊では、軍人精神を鍛えるためにそんなことが当たり前。それが日本の軍隊。そのうち、終戦を迎える。誰もが帰れると疑わなかった。

人間の尊厳が失われていく生活

八月二十九日、捕虜になる。運動場の板の間に避難民のように過ごしていた。帰国どころか、捕虜生活も三ヶ月が過ぎる。一月の樺太の寒さが身に沁みる。屋根だけの民家で、毛布一枚で眠る。また移動。今度は列車で家畜の貨車。ぎゅうぎゅうに詰め込まれる。家畜でもこんな詰め方はしない。鉄扉を閉めて外からガチャンと錠をかける。床や壁には家畜の糞がこびりついていて異臭がひどい。もう人間扱いではない。身動きもとれない。放尿も垂れ流し。排泄設備のない中、大便秘は大変だ。野原のど真ん中に停車。監視兵が自動小銃を構えて見張っている。扉が開かれると、一斉に貨車から飛び出して、ベルトを外すと同時に脱糞。隠れてする余裕などない。列車の両側に千人が一斉に尻を突き出して野糞の行列だ。惨めな屈辱も極限を超えている。戦争の敗者とはこんなものか…。

悪夢の排便・・・

また、同じ場所に戻ってきた。便意をもよおしてきたので、砂浜に出ると足の踏み場もないくらい脱糞の小山が続いている。何万人という軍隊の排

泄物。果てしなく続いている。近くには人家が立ち並んでいる。背に腹はかえられず、その一角によりやく足を踏み入れかがみ込む。腰を下ろすと尻に山が届きそうで、中腰で用を足さなければならぬ。それは悪夢の排便だった。

こんな捕虜生活が三ヶ月も続き、当てもなく引きずり回されると、精気を失う。風呂も入らず、雨に叩かれ、野宿をしていると、シラミがいろいろのさばる。身体全体を這い回るほど食いつき、血を吸っているのだからとても潰しきれない。まるで蟻地獄。横になると、体中をもそもそとシラミが動き出す。手に触ったやつをつまんで潰すのが抵抗の限界。いつ帰れるのか…。

シベリア抑留・強制労働

我々の部隊はシベリアに上陸し、強制労働。誰も予期できない現実。ただ呆然。まさに奴隷船。零下五〇度という凍原の重労働。生きて帰れるのか。タク部屋を連想。樺太の收容所で、捕虜の惨めさ、そして、人間性無視の行為を強いられる。「非人間的な生活がいつまで続くのか」その悲惨な現実人間の感覚が失われていく…。

シベリアの一月は、もう冬なのか砂が凍り付いている。この砂浜で野宿だ。凍り付いた砂の上に座る。お互いの体温であたたまると、下着一面に密生しているシラミがモソモソと動き出す。凍った砂が融け、尻や背中に冷たく沁みってくる。餓えと零下三・四〇度の労働は、苛酷極まった。後で知ることになるが、シベリアの捕虜六〇万

人の内六万人を越える死者が出た。こんな捕虜二年の生活が続いたのち帰国する。京都にある舞鶴の港が近づくにつれ、みんなボロボロと泣いた。避けてきた戦争体験を今語り継ぐ

こんな惨めな話は、避けてきた。自慢できることでもない。しかし、戦争体験者として義務ではないかと今思い返している。それは、今の世の中に危機感を感じているから。

経済本位で良いのか

今の世の中は、なんでも「経済本位」。金を稼ぐために東京に集中する。経済のためならそのけそこのけという感じで、合理化するし、村も町も合併してしまふ。果たしてこれで良いのか。東北の震災で、あれだけの災害があつて、原子力発電という始末に負えないものを経済のためにやる、日本経済を立て直しと…。本当に必要な。お金は必要だけでも、バランスを考え、我々の生活も考えていかなければならない。

経済のためには戦争もする

経済のためには戦争もすることに。なりはしないか。秘密保護法もその時代の治安維持法みたいだ。都合の悪いことはみんな潰してしまふと…。権力は金のためということを隠して、もつともらしい大義名分で行わねばと住民生活を壊す。この本の自費出版は「戦争を二度と起こしてはならない」という決意だ。



熱心に聴き入る参加者

